

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに淨土にうまるるたねにてやはんべるらん、また、地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもって存知せざるなり。たとい、法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。そのゆえは、自余の行もはげみて、仏になるべかりける身が、念仏をもうして、地獄にもおちてそうらわばこそ、すかされたてまつりて、という後悔もそうらわめ。いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

苦悩の現実の

真っただ中に生きる

第9組 光専寺住職

古卿 誠幸

text by Hurukimi Nobuyuki

『文芸春秋』に掲載されていた、その文章は「諸行無常」という言葉で始まっています。

昨年(2019年)の11月に亡くなった俳優の高倉健氏の「高倉健最後の手記」と題されたものです。執筆中に体調を崩し入院中にベッドの上で推敲を重ね、亡くなる四日前に完成したと記されています。

12歳で終戦を迎え、大学卒業後、不本意ながら映画俳優となり、その事により父親から勘当されていた事もあったといわれています。俳優という一見華やかな職業の様ですが、内実はかなり過酷な状況であったことが綴られてあり、同時に自身の苦悩が切々と吐露されていました。

晩年の安田理深先生(明治33年—昭和57年)が、お弟子さんの「いかがお暮らしですか」というお尋ねに対して「あえぐように生きているというほかない」という御返事をされたそうです。(あえぐ【喘ぐ】せわしく呼吸する。荒い息づかいをする。転じて、苦しむ。『広辞苑』)

人間は生まれると同時に苦悩という問題を抱えます。この問題は人間の力ではどうすることも出来ない普遍性の問題であり、同時に私一人という個人の問題なのです。

仏教は人間を単に存在しているのではなく、苦悩しつつ存在するもの、さらにその事を自覚する存在、覚存としています。

その苦悩にあえぎながら覚存せしめられて行くところに阿弥陀仏の救いがあり、そして衆生が仏に救われる因は念仏と信心によるという教えが宗祖の開顕せられた浄土真宗でありました。

宗祖はその浄土真宗の正依の経典として、

それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。

(『真宗聖典』152頁)

と記されています。

その大無量寿経が展開されていくところに「嘆仏偈」があります。それは、国王だった法蔵の、無限の過去を象徴する五十三仏が、それぞれ多くの人々を救済し、浄土へ帰って往かれ、その次に出現した世自在王仏が同じく人々を救済しておられた時に、その説法を聞き大いに感動し、我もまた願を起し仏道に入り法蔵菩薩となり、師である世自在王仏に向いその徳を讃えた偈文です。

その最後のところに

假令身止 諸苦毒中

我行精進 忍終不悔

たとい、身をもろもろの苦毒の中に止るとも、我が行、精進にして、忍びて終に悔いじ。

(『真宗聖典』13頁)

とあります。この所を藤田宏達先生は「わたくしは、無間(地獄)に行つて常に住することになろうとも、誓願の力を決してひるがえさないであろう。」と訳しておられます。さらに里村専精先生は「『地獄をも生き抜いて見せよう』というのが仏教の菩提心(道心)ですし、「他力の信心」でもあります」(『大無量寿経を読む』)と読み取られています。

人知れずとも皆様々なかたちで苦悩にあえぎながら生きているのではないのでしょうか。しかし、その苦悩は私一人のものであっても、あえぎは私一人のあえぎではなかったのです。その苦悩のあえぎの中に南無阿弥陀仏の「あなた一人を救わずにおかん」という願いがあったのです。

高倉健氏はその手記の最後に、千日回峰行を二度満行した天台宗大阿砂利 故酒井雄哉師から戴き大切にしてきたという嘆仏偈を暗示させる言葉、「往く道は精進にして、忍びて終り、悔いなし」という言葉で終わっています。それは、どこまでも仏から十方衆生と呼びかけられている私たちは、高倉健氏も酒井雄哉師も皆共に、法蔵菩薩の大きな誓いのなかにあつたということなのです。

そこに、そのまま「苦悩にあえぐように」安んじて本願念仏の中に生きるのです。